

博士論文審査報告書

氏 名	名越 斉子
学 位 の 種 類	博士（心理学）
学 位 記 番 号	院博甲第 32 号
授 与 機 関	東京成徳大学
学位授与年月日	2025 年 3 月 19 日
学位授与条件	学位規則第 5 条第 1 項
学位論文題目	McCloskey 理論を用いた実行機能のアセスメント —特別な教育的ニーズをもつ子どもへの適用をめざして—

1. 論文概要：（1）目的、（2）方法、（3）結果及び考察

（1）博士論文の目的

本研究の目的は、日本の特別な教育的ニーズ（Special Educational Needs：SEN）をもつ児童生徒（以下 SEN 児）の実行機能の実態を的確に捉え、支援につなげることでできる実行機能アセスメントの開発とその活用のあり方の検討を行うことであった。

（2）研究 1

研究 1 の目的は、実行機能に関する研究動向を整理することであった。方法は、概念等に関しては、各テーマを扱っている主に 2000 年代の関連の国内外論文を調査し、支援に関してはシステマティックレビューや公的教育機関・研究機関の web サイト上の教育に関する情報整理の手法を用いた。全体で、約 330 の論文を調査した。主な結果と考察として、実行機能は、学業や対人関係、将来の社会的成功や健康等の適応の予想指標であるが、関連し合う複数の構成要素や機能を包含する多次元的な特徴を持つ多様なモデルが提案されており、それぞれに教育への示唆に富んでいた。

（3）研究 2

研究 2 の目的は McCloskey の実行機能理論の整理と日本語版 McCloskey Executive Functions Scale（J-MEFS）の開発と量的手法による妥当性検証を行うことであった。方法として、2017 年の項目開発、2017-2018 年の 2 度の予備調査を経て、2019 年 6-12 月の標準化調査により、全国の小中学校の通常学級在籍 1187 人のノルムデータで J-MEFS の標準化を行った。妥当性検証で用いたデータは、先の標準化調査と 2019 年 12 月—翌年 3 月に実施した妥当性調査で収集した、非 SEN 群 1114 人（男 556 女 558）と SEN 群男 122 人である。主な結果と考察は、McCloskey の実行コントロールモデルのうち、第 2 層自己調整（7 クラスタ、実行キャパシティを測る 31 下位スケール）76 項目と第 3 層自己認識・自己決断（2 クラスタ、実行キャパシティを測る 5 下位スケール）14 項目、評定の一貫性 4 項目、合計 96 項目からなる教師評定尺度の日本語版である J-MEFS を作成した。非 SEN 群（1114 人）での確認的因子分析、非 SEN 群

(1114 人) および SEN 群男 (111 名) のクラス間相関や文脈間相関の分析結果は、内的構造の側面から J-MEFS が McCloskey の理論に即した構造であると示唆した。

(4) 研究 3

研究 3 の目的は、SEN 児の実行機能の困難や強みは、J-MEFS の結果にどのように表れるのか、また、McCloskey の実行機能理論を用いた実行機能のアセスメントと支援は有用であるのかを検討することであった。方法として、202x 年 6 月—202x+1 年 3 月、5 つの公立小中学校の通級指導教室と 2 つの専門機関に依頼し、支援を受けている通常級在籍の「実行機能の困難があると思われる」SEN をもつ 16 事例を収集した。主な結果と考察では、16 事例の J-MEFS の結果には低いパーセンタイル順位を示すクラスタがあり、指導者による実行機能困難の見立てと合致し、J-MEFS が生態学的妥当性を有することを示唆した。

(5) 総合考察

以上の 3 つの研究を踏まえて、臨床的、実践的視点から、McCloskey の実行機能理論を用いた SEN 児の実行機能のアセスメントおよび支援のあり方について論じられた。また、学問的、実践的貢献ならびに本研究の限界と課題についても言及された。

2. 評 価：

日本語版 McCloskey Executive Functions Scale (J-MEFS) の開発と量的手法による妥当性検証は心理学、特別支援教育の領域において、新しい貢献であると評価できる。尺度の開発と妥当性検証の手続きもしっかりと執行できている。さらに事例の検討から、J-MEFS の活用モデルを示唆したことも、臨床心理学、特別支援教育への貢献として評価できる。博士論文としての条件を十分に満たしている。

3. 最終試験結果：

2025 年 2 月 5 日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

4. 結 論：

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

2025 年 2 月 17 日

〈 所 属 ・ 職 名 〉		〈 確 認 者 氏 名 〉
主 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 教授	茂呂 雄二
副 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 特任教授	石隈 利紀
副 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 准教授	別府 さおり
副 査	東京成徳大学大学院 心理学研究科臨床心理学専攻 准教授	菊池 春樹